

宿命の糸

渡辺 一夫
1953
朝日新聞

昔、フランスの数理哲学者のアンリ・ポワソナレ Henri Poincaré (1854—1912) の『科学の価値』という本で読んだことですが、多少理屈をこねますと、偶然と必然とは、楯の両面のようなものらしいのです。たとえば、僕が、ある日、学校の研究室へ行く途中、階段を三段のぼったところで、おりてくるA君に出会ったとします。A君も僕も、「偶然出会った」と申すでしょう。しかし、その日のA君と僕との行動を、客観的に眺めてみますと、少しも偶然ではなくります。僕は〇時〇分に家を出、〇時〇分に学校に着き、〇分後には、階段の三段目に足をかけていたのですし、A君は〇時〇分に家を出、〇時〇分には階段の四段目（下から数えて）へ足をおろしていたのです。A君と僕との行動をおのおの一つの直線とすれば、この二つの直線が、階段の三段目あたりで交差すること、この二つの直線が引かれ始めたときから（つまり、二人がおのおの家を出る時から）必然だったことになりました。

戦争中友人から次のような話を聞きました。この友人は、西荻窪の「省線」の駅で降りて、自転車で家へ帰るのを常としていましたが、ある日のこと、駅を出たときに空襲になったのでした。友人は、同じように自転車で家路に向かう顔見知りの近所の人と、どうしようかと相談しましたが、二人とも家のことが心配になり、しかも、その時は、たった一機の来襲でしたので、二人とも、自転車で全力疾走をして帰途につきました。ところが、畑道を

走って、二人の家までもう一息というところまで来た時には、敵機が後方からぐんぐんと追いついてきました。僕の友人は、恐怖に駆られ自転車を止めて、道ばたにうずくまりましたが、相棒は、必死の勢いで力走して行きました。しばらくたつと、どかんどかんと爆弾の炸裂する音が聞こえました。友人は、やれやれと、ふたたび自転車で乗り帰ったのですが、まもなく、次のようなことがわかりました。必死の力走をした相手は、家にたどりつき、庭の退避壕へ駆けこんだ瞬間に、爆弾が壕に命中し、一家全員とともに消え失せたのでした。まさに必死の力走だったわけです。

「まったくね、あの人は爆弾の落ちるところへ吸い寄せられたわけだよ。爆弾に当たるために爆弾の落ちるところへ、自分で行っちゃったのさ。傍で見ていた僕としては、爆弾投下と、あの人の全力疾走との間に、見えない糸が張られていたようだったね」と、友人は付け加えました。

この場合も、偶然と必然とが背中あわせになっているように思います。犠牲者が退避壕に飛びこんだときに、爆弾が命中したことは偶然とも思われますが、敵機が基地を飛び立った時から引かれた一直線と、爆死した人が西荻窪の駅から自転車で必死の力走を始めた時から（いや、それ以前の時期、その人が、この地球上へ生れた時から、と言ってもよいかもしれませんが）、その時から引かれたもう一つの直線とが、爆死という点でびたりと交差したことは、その原因結果を精密に調べれば調べるほど、必然にほかならなくなりました。

このような論法で申せば、この世のなかには、偶然というようものはなに一つなく、すべてが必然だということにもなります。幸か不幸か、われわれ人間の認識力・判断力には限界があるために、複雑な原因結果によって成りたっている現実を、精密に分析できるはずはないのです。僕は、研究室の階段の三段目に足をかけるのが何時何分であるかというようなことを、平生計算してはいませんが、A君が、何時何分に家を出て、何時何分に階段をおりはじめるかということを考える能力はまったくありません。A君にしても同様でしょう。爆死した人にしても、

爆弾を投下したアメリカ兵にしても、何時何分に、先に記したようなことが起こるといふような測定は、できるはずはありません。射撃の名手にねらわれて死んだ人は、必然的に死んだと、われわれは申しませんが、流れ弾に当たって死んだ人は、偶然、弾に当たったということになります。しかし、流れ弾は、銃口を飛び出す時から、A地点をB時C分に通過することになっていましたし、不幸な犠牲者は、はじめから、B時C分にA地点に体を位置させるように行動していたのですから、必然と申すこともできます。

要するに、われわれが精密にあらゆる原因結果を分析識別できないからこそ、偶然だとか、幸運・不運だとか、「目に見えない糸」だとか、「宿命」だとかいう考えをいただくのかもしれませんが。

必然的に生れてきた人間は、必然的な事故に見舞われぬ限り、必然的に老衰して必然的に死にます。しかし、こうした明瞭な原因結果を、どうしてもきわめつくすことができないのが、われわれ人間の救いにもなっているようです。「この自分が死ぬなんて考えられない」という感慨も生れ、生きるための必死の営みに、われわれを忘れるのが、われわれ凡俗の行為となります。「死と太陽とは直視できない」と、ラ・ロシュフコー La Rochefoucauld (1613-1680) という昔の人は申しましたが、わずか六時間でも、自分の死について考え通せる人はいないらしいことは、われわれ、凡俗の救いともなりましょう。僕などは、三十分も、自分の死について考えつめられませんが、むしろ、途中で、ほかのことを考えたり、疲れたりするのが、生きている僕の常態でしょう。一番確実な死という必然ですら、われわれ凡俗は、親身になって考えられないことが、われわれのはかない幸福の基盤となっているからです。

なにも「死」だけに限りません。昔から言われているとおり、「明日のことはわからない」ものですし、「一寸先は暗闇」なはず。「未来の世界へ後退りしつつはいつてゆく」と言ったポール・ヴァレリー Paul Valéry (1871-1945) の言葉は、われわれにもよくわかります。もっともヴァレリーは、「だから、過去の経験を十二分に生かし

てほしい」と申し立てるのでしょうが、健忘症なわれわれは、かならずしも、過去の経験を生かそうともいたしませんから、あんぐりと大きな黒い口を開いた未来世界へ向かって、われわれは、過去と同じようなことを繰り返しながら、後退りしつつ没入するものようです。その間、必然だけであり、偶然と思う場合は、それは、われわれが、複雑な原因結果を分析識別できないからにはかならないとも申せます。

昔も今も、明日あるいは未来に対する不安は「死」に対する不安よりも先に、人間を悩ませていきます。松川事件の被告が全部無罪になったにもかかわらず、真犯人の追及はまったく不可能になってしまったような悪知恵の黒い霧におおわれた現代、一発で何万人もの人が消えさるような爆弾をかかえた国々が、おのおの平和・自由・正義の旗印の下で、歯をむき出し合っている現代に、少しでも物を考える若い人びとが、たまたまなくなって、無軌道な行為に出るのも、年とった人びとが、なにか超自然なものにすがりつきたくなくなるのも、当然かもしれませぬ。

昔も今も、将来に対する不安から、いろいろな占筮うらなひを信ずる人びとがおりますし、われわれが、必然を分析し尽くせない弱みがありますためか、昔から多くの占筮師やさまざまな占筮が生まれました。ルネサンス時代に、ミシエル・ド・ノートルダム（ノストラダムス）Michel de Notredame (Nostradamus, 1503-1566) という星占いがおり、フランス革命まで見通していたということですが、世人には分析できない必然を分析するだけの知力をそなえていたのでしょう。この人は、こうした力を身につけたために、あの酷薄な時代にも、気味の悪い人物と見なされたためか、思想的な迫害を受けずにみなな畏敬を受け通しました。こうした生き方は、人間世界の盲点をのぞかせてくれます。同じ時代のフランソワ・ラブレール Francois Rabelais (1494?-1553?) という人は、その『パンタグリユエル物語第三之書』Le Tiers Livre de Pantagruel (1546) 第二十五章で、古代から伝わった約三十種類の奇異な占筮を解説しています (Pyromantie-Necromantie)。ただし、ラブレールは、その戯作『パンタグリユエル占筮』の中で、「本年は、盲人の目はよくわずかし見えぬし、聾者の耳はよく聞こえぬし、啞者はほとんど口

をきくまいし、金持は貧乏人よりも具合がよろしかろうし、健康な人は病人とくらべれば調子がよろしかろう」などと、必然そのものなことを記しています。しかし、このラブレールの話は別の機会に……。

まったく明日のことはわかりません。この世にまだ生きのびようと思つたら、わかる限りの必然を突きとめて、しかるべき手を打つ以外にしかたがないでしょうし、あるいは、信じられる占筮の指示に従って安心立命の道を開く以外に手はないのかもしれない。老書生の僕は、占筮師になる能力もなく、必然を分析もできず、さりとて占筮師の門をたたく気持もありません。死の床で、「やれやれ！　これでおしまいだ！」とつぶやけば、大成功だと思つて、残る日々を送ることにしています。(1963)